

準拠集団と道德性の発達

(第1報告) 子どもの準拠人

古畑和孝・向井敦子

問題：道德性発達の心理学的基礎に関する研究は、つとに沢田慶輔教授（東京大学名誉教授）を主任研究者として、何回かにわたって文部省科学研究費による試験研究助成金の交付を得て、進められてきている。筆者らもその分担研究者として、その一端を担う機会が与えられてきたが、ここにはその第1報告として、その分担研究課題の計画の概要ならびに、その第1段階として行なった、準拠集団調査に関する基礎資料について報告しようとするものである（古畑・深見・発智，1971）。その後の具体的成果は次号以下に順次報告を行ないたい。

さて、道德性の発達に関してもまた、発達の他の諸側面におけると同様、多様な観点・枠組からのアプローチが試みられてきている（たとえば、Hoffman, 1970, Wright, 1971）。今それを詳論することは避け、それは別の機会に俟ちたい。しかしながら、その一端は既に観たように（古畑, 1973, 1974）、Piaget (1932, 1967)、さらには Kohlberg (1963, 1964, 1969) に代表されるような、認知的発達段階の構想に基づく観点がある。たとえば、道德判断反応の発達に関し、7歳頃を境として、第1段階の客観的責任性——結果論的判断から、第2段階の主観的責任性——動機論的判断が優位となる方向への発達の推移に、既定の系列にしたがった個体発生的要因に帰せられるとする Piaget の観点はその最たるものといえよう。

これに対し、学習、ことに社会的学習の立場から、Bandura ら (1963 a, 1963 b, 1969, 1972) は、道德判断反応は、年齢など発達の要因によって規定されるのではなく、反応の社会的強化のコンティンジェンシーの操作と、適切な社会的モデルの用意とによって変容させうるのみならず、

逆転させることすら可能だとして、その実証を試みた。その一連の実験は、Piaget らのそれとはまさに対蹠的立場をなすものである(古畑, 1973, 1974)。

精神分析の観点よりの展望もまた逸することができないのは言うまでもないが、ここにはその論及は割愛する(たとえば, Wright, 1971 参照)。

これらの観点とともに、個々人が一定の集団内で相互作用をおこなっているとき、その集団に発達してくる規範に従い、同調する傾向、その規範による斉一性への圧力を受ける傾向、そしてまた、ある集団の中における、一定のポジションと結びついた規範にかかわるものとしての役割に対応する行動を行なう傾向、このような視点から個々人の道徳的行動をみようとする立場もある。社会的規範、その人の社会的役割によって、道徳的行動はかなり大幅に規制されると考えられるからである。ことに、その集団が単に所属しているのではなく、所属したいと願う集団であり、その集団の基準を、個人の価値判断・行為の基準とし、また他と比較考量を行なう際の基準とするような、そのような集団である場合、われわれはこれを準拠集団 (reference group) と称するが、道徳性の発達・形成、あるいはその変容に関与するひとつの要因として準拠集団の意義を指摘しているものもある(たとえば, Wright, 1971)。

しかしながら、その具体的証拠となると、きわめて乏しい(たとえば, Hyman & Singer, 1968)。また、準拠集団の把握の仕方、その測定法は必ずしも一定していない。それを把える網の目は比較的あらい。さらに、具体的相互作用のレベルで観ていくなれば、準拠集団全般に人は反応しているというよりは、むしろ特定の状況で、特定の問題との関連で、その中の特定の構成員に準拠していることの方が一般的であると考えられる。とするならば、一般に必ずしも多用されている概念ではないが、Newcomb のいう準拠人 (reference person) をひとつの単位としてみていくこともまた意義があると思われる (Newcomb *et al.*, 1965, 1973)。

そこで、本研究においては、道徳性発達に寄与する一要因としての準拠集団を、ことにその構成要素としての準拠人に焦点をあてて取り上げ、準

拠人・準拠集団と道德性の発達との関連を、具体的には次のような段階を経て、考察しようとするものである。

研究計画の概要

- 1) 準拠集団に関する調査：従来の準拠集団研究の概念・測定法などを系統的に検討し、規範機能および比較機能を吟味の後、その測定具を試作する。それは被験者の発達段階を顧慮し、子どもの典型的な生活場面を、Ⅰ．現実、Ⅱ．期待・願望の両水準から把握し、それぞれの場面で子どもの主として準拠する対象を問う形式の質問紙法による。子どもの準拠人・準拠対象を、全般的に、各場面別に、および各個人別に、その反応を通して分析する。
- 2) 道德性発達に関する指標を得るための調査：1と同一の被験者群を対象として、子どもの具体的生活場面で遭遇する可能性のある、主として対人的葛藤状況での、道德的心情・判断・行為などを含む問題を設定して、これを簡単な記述で示し、そのそれぞれに対する子どもの反応を、予め用意した4選択肢の中から最適のひとつを選ばせる形式のテストを試作する。多肢選択式を用いるのは、古畑（1967）が以前に共同研究者と考案した自由記述式のものと対比の意味もある。

テストの場面は、具体的には、規則・約束の遵守、規則違反への対処、誘惑への抵抗、反道德的衝動の制御、他者への配慮、正義感、責任感などを含むものである。詳しくは、次回の報告を参照されたい。

- 3) 準拠集団と道德性発達との関連に関する調査および実験：(i) 上記1および2で得られるそれぞれの指標より、その両変数間の相関関係の分析を試みる。

(ii) 自己の道德判断反応と準拠人の道德判断反応の異同の認知の、その後の自己の道德判断の変容に及ぼす効果を、実験社会心理学的方法を導入して、実験的に因果的に考究する。これらの点についても、後の報告で詳述する予定である。

方 法

1) 準拠対象調査用の質問紙の作成。既成のものの中には、本研究に利用しうるものを見出し得なかったため、被験者の年齢・発達段階に則して、子どもの生活場面を、殊別的・具体的なものから、やや一般的・抽象的な面にまでわたって考え、小・中学校教師数名の吟味を経て、結局それを10場面に収斂・限定し、各場面を、Ⅰ．現実、Ⅱ．期待・願望のそれぞれ対応する2水準で把えることにした。

準拠対象は、家族集団から友人・同輩集団にわたる5種類の選択肢をはじめ設けたが、種々検討の結果、結局それをさらに特定化して準拠人の形で把えることとした。その対象は、A・父、B・母、C・兄弟、D・姉妹、E・友人、F・先生、G・親戚およびその他の7種類の選択肢の中から最適のひとつを選ぶ形式とした。必要に応じ、準拠人を基に、家族集団、同輩集団に纏めるようにもした。なお、各場面ごとの被験者の関与度をチェックしうるように、附随的に、各項目ごとに3段階での反応をも求めた。

その質問紙の概要は以下に示す通りである。

準拠人・準拠集団調査用質問紙の根幹部

I 次に書いてある文章をよく読んで、いちばんぴったりする人をひとりえらんで、○でかこんでください。次に、その人との関係でいちばんよくあてはまると思うものを、イ、ロ、ハの中からひとつえらんで、○でかこんでください。

1) あなたが勉強やテストのことなどで話をしたり、相談をしたりする人は……

父 母 兄弟 姉妹 親戚(具体的に:)

親友(同級 同学年 他学年 他校) 先生(学校の先生 塾の先生
その他)

その他(具体的に:)

○その人とは、勉強やテストのことなどについて、どれくらいよく話したり、相談したりしていますか。

イ いつもしている ロ ときどきする ハ あまりしない

2) あなたがだれかといっしょによそへ行くとき(たとえばサイクリングやハイキングなどに行くとき)、いっしょに行く人は……

3) あなたが好きなテレビ番組のことについて、おしゃべりをしたり、話をしたりする人は……

4) あなたがことばづかいや服装のことなどで、まねをしたりお手本にしたりする人は……

表1-1 10の場面別に見た準拠対象 (小学4年)

	場面 準拠 対象	場面				
		1	2	3	4	5
小 4 ・ 男 I	父	30(22.7)	56(42.4)	10(7.5)	38(28.8)	19(14.5)
	母	82(62.1)	31(23.5)	11(8.3)	16(12.1)	3(2.3)
	兄 弟	8(6.0)	6(4.5)	41(30.8)	14(10.6)	18(13.7)
	姉 妹	3(2.3)	5(3.8)	26(19.6)	10(7.6)	5(3.8)
	友 人	5(3.8)	29(22.0)	45(33.8)	47(35.6)	85(64.9)
	先 生	1(0.8)	0	0	1(0.8)	0
	その他	3(2.3)	5(3.8)	0	6(4.5)	1(0.8)
計		132	132	133	132	131

小 4 ・ 男 II	父	61(46.6)	33(25.0)	29(22.1)	44(33.3)	44(33.3)
	母	37(28.2)	22(16.7)	24(18.3)	26(19.7)	13(9.8)
	兄 弟	11(8.4)	9(6.9)	21(16.0)	6(4.5)	14(10.6)
	姉 妹	3(2.3)	5(3.8)	8(6.1)	3(2.3)	5(3.8)
	友 人	9(6.9)	57(43.2)	40(30.5)	35(26.6)	51(38.6)
	先 生	7(5.3)	0	5(3.8)	11(8.3)	2(1.5)
	その他	3(2.3)	6(4.5)	4(3.1)	7(5.3)	3(2.3)
計		131	132	131	132	132

小 4 ・ 女 I	父	27(22.9)	40(33.9)	4(3.4)	8(6.8)	17(14.4)
	母	73(61.9)	41(34.7)	7(5.9)	45(38.1)	11(9.3)
	兄 弟	1(0.8)	6(5.1)	36(30.5)	0	16(13.6)
	姉 妹	11(7.3)	11(9.3)	34(28.8)	28(23.7)	28(23.7)
	友 人	4(3.4)	12(10.2)	37(31.4)	32(27.1)	44(37.3)
	先 生	2(1.7)	0	0	2(1.7)	0
	その他	0	8(6.8)	0	3(2.5)	2(1.7)
計		118	118	118	118	118

小 4 ・ 女 II	父	50(42.4)	24(20.3)	30(26.1)	9(7.7)	31(26.1)
	母	34(28.8)	33(28.0)	13(11.3)	52(44.4)	22(18.5)
	兄 弟	11(9.3)	9(7.2)	12(10.4)	3(2.6)	5(4.2)
	姉 妹	9(7.6)	9(7.2)	25(21.7)	13(11.1)	15(12.6)
	友 人	6(5.1)	37(31.4)	31(27.0)	27(23.1)	44(37.0)
	先 生	6(5.1)	1(0.8)	4(3.5)	10(8.5)	1(0.8)
	その他	2(1.7)	5(4.2)	0	3(2.6)	1(0.6)
計		118	118	115	117	119

() 内は% ○印：その場面での顕著な準拠対象

6	7	8	9	10	計
32(24.2)	62(47.7)	49(37.1)	46(34.9)	39(29.3)	381(28.9)
75(56.9)	44(33.9)	59(44.7)	66(50.0)	79(59.3)	466(35.3)
6(4.5)	2(1.5)	7(5.3)	4(3.0)	4(3.0)	110(8.3)
6(4.5)	5(3.8)	4(3.0)	2(1.5)	5(3.8)	71(5.4)
12(9.1)	8(6.2)	13(9.9)	6(4.5)	5(3.8)	255(18.3)
0(.)	7(5.4)	0	5(3.8)	0()	14(1.1)
1(0.8)	2(1.5)	0	3(2.3)	1(0.8)	22(1.7)
132	130	132	132	133	1319

52(39.4)	64(48.5)	65(49.2)	53(40.2)	53(40.2)	498(37.8)
50(37.9)	35(26.6)	41(31.1)	49(37.1)	49(37.1)	346(26.3)
10(7.6)	3(2.3)	3(2.3)	8(6.1)	10(10.6)	95(7.2)
3(2.3)	4(3.0)	2(1.5)	3(2.3)	2(1.5)	38(2.9)
14(10.6)	17(12.9)	14(10.6)	15(11.4)	14(10.5)	266(20.2)
3(2.3)	8(6.1)	6(4.5)	4(3.0)	3(2.3)	49(3.7)
0	1(0.8)	1(0.8)	0	1(0.8)	26(2.0)
132	132	132	132	132	1318

12(10.2)	56(47.5)	17(14.4)	41(34.7)	21(17.8)	243(20.6)
72(61.0)	40(33.9)	81(68.6)	66(55.9)	89(75.4)	525(44.5)
2(1.7)	3(2.5)	1(0.8)	2(1.7)	1(0.8)	68(5.8)
13(11.0)	5(4.2)	9(7.6)	4(3.4)	2(1.7)	145(12.3)
18(15.3)	10(8.5)	9(7.6)	1(0.8)	4(3.4)	171(14.5)
0	4(3.4)	0	4(3.4)	0	12(1.0)
1(0.8)	0	1(0.8)	0	1(0.8)	16(1.4)
118	118	118	118	118	1180

27(22.9)	44(37.3)	30(25.4)	57(48.3)	35(29.7)	337(28.6)
47(39.8)	29(24.5)	52(44.1)	31(26.3)	58(49.2)	371(31.5)
7(5.9)	7(5.9)	7(5.9)	2(1.7)	4(3.4)	67(5.7)
11(9.3)	9(7.6)	8(6.8)	5(4.2)	7(5.9)	111(9.4)
16(13.6)	21(17.8)	14(11.9)	17(14.4)	10(8.5)	223(18.9)
7(5.9)	6(5.1)	3(2.5)	5(4.2)	3(2.5)	46(3.9)
3(2.5)	2(1.7)	4(3.4)	1(0.8)	1(0.8)	22(1.9)
118	118	118	118	118	1177

表 1 - 2 10の場面別に見た準拠対象 (中学1年)

	場面 準拠 対象	1	2	3	4	5
		中 I ・ 男	父	12(14.6)	6(7.1)	6(7.2)
母	19(23.2)		2(2.4)	4(4.8)	7(8.7)	1(1.1)
兄 弟	15(18.3)		5(6.0)	17(20.5)	11(13.8)	13(14.8)
姉 妹	6(7.3)		1(1.2)	5(6.0)	2(2.5)	3(3.4)
友 人	30(36.6)		68(80.9)	51(61.5)	41(51.3)	62(70.5)
先 生	0		0	0	2(2.5)	0
その他	0		2(2.4)	0	5(6.2)	1(1.1)
計		82	84	83	80	88

中 II ・ 男	父	17(20.2)	8(9.6)	7(8.8)	11(13.6)	20(23.8)
	母	14(16.6)	3(3.6)	3(3.7)	7(8.6)	2(2.4)
	兄 弟	13(15.5)	10(12.1)	14(17.5)	11(13.6)	14(16.7)
	姉 妹	3(3.6)	0	3(3.7)	3(3.7)	2(2.4)
	友 人	26(31.0)	60(72.3)	51(63.8)	40(49.4)	44(52.3)
	先 生	7(8.3)	1(1.2)	2(2.5)	6(7.4)	1(1.2)
	その他	4(4.8)	1(1.2)	0	3(3.7)	1(1.2)
計		84	83	80	81	84

中 I ・ 女	父	8(11.1)	8(10.8)	2(2.8)	0	3(4.3)
	母	12(16.7)	11(14.9)	3(4.2)	14(20.3)	6(8.7)
	兄 弟	2(2.8)	3(4.1)	3(4.2)	0	2(2.9)
	姉 妹	14(19.4)	12(16.1)	14(19.8)	12(17.4)	22(31.9)
	友 人	33(45.8)	36(48.6)	48(67.6)	35(50.7)	30(43.5)
	先 生	3(4.2)	1(1.4)	1(1.4)	2(2.9)	1(1.4)
	その他	0	3(4.1)	0	6(8.7)	5(7.3)
計		72	74	71	69	69

中 II ・ 女	父	5(7.4)	9(13.0)	6(8.8)	1(1.4)	9(12.5)
	母	14(20.6)	10(14.5)	11(15.9)	18(25.7)	13(18.1)
	兄 弟	6(8.8)	2(2.9)	4(5.8)	1(1.4)	2(2.7)
	姉 妹	6(8.8)	8(11.6)	11(14.9)	13(18.6)	8(11.1)
	友 人	21(30.9)	31(44.9)	31(44.9)	23(32.9)	33(45.8)
	先 生	15(22.0)	1(1.5)	4(2.8)	7(10.0)	1(1.4)
	その他	1(1.5)	8(11.6)	2(2.9)	7(10.0)	6(8.3)
計		68	69	69	70	72

() 内は% ○印：その場面での顕著な準拠対象

6	7	8	9	10	計
9(11.1)	29(34.9)	40(47.6)	29(35.0)	15(19.2)	166(20.1)
31(38.3)	15(18.1)	24(28.6)	23(27.7)	43(55.1)	169(20.5)
4(4.9)	10(12.1)	5(6.0)	5(6.0)	4(5.1)	89(10.8)
0	0	1(1.2)	0	2(2.6)	20(2.4)
32(39.5)	27(32.5)	14(16.6)	21(25.3)	13(16.7)	359(43.5)
2(2.5)	2(2.4)	0	4(4.8)	0	10(1.2)
3(3.7)	0	0	1(1.2)	1(1.3)	13(1.6)
88	83	84	83	78	886

20(23.8)	28(32.6)	39(45.3)	25(30.5)	27(32.0)	202(24.2)
20(23.8)	15(17.4)	16(18.6)	16(19.5)	23(27.4)	119(14.3)
3(3.6)	7(8.2)	5(5.8)	5(6.1)	5(6.0)	87(10.4)
1(1.2)	1(1.2)	1(1.2)	0	2(2.4)	16(1.9)
32(38.0)	22(25.6)	15(17.4)	24(29.3)	25(29.8)	339(40.6)
5(6.0)	10(11.6)	9(10.5)	11(13.4)	2(2.4)	54(6.5)
3(3.6)	3(3.4)	1(1.2)	1(1.2)	0	17(2.0)
84	86	86	82	84	834

2(2.8)	23(32.4)	16(22.2)	14(20.0)	7(9.6)	83(11.7)
25(35.2)	19(26.8)	28(38.9)	26(37.1)	39(53.4)	183(25.7)
0	1(1.4)	1(1.4)	0	1(1.4)	13(1.8)
11(15.5)	6(8.5)	4(5.5)	6(8.6)	9(12.3)	110(15.4)
30(42.3)	17(23.9)	21(29.2)	18(25.7)	16(21.9)	284(39.9)
2(2.8)	2(2.8)	1(1.4)	4(5.7)	1(1.4)	18(2.5)
1(1.4)	3(4.2)	1(1.4)	2(2.9)	0	21(2.9)
71	71	72	70	73	712

6(8.5)	20(28.2)	19(26.8)	15(21.1)	10(13.9)	100(14.2)
32(45.1)	14(19.7)	31(43.7)	19(26.8)	35(48.6)	197(28.0)
1(1.4)	1(1.4)	0	1(1.4)	0	18(2.6)
4(5.6)	6(8.5)	3(4.2)	8(11.3)	4(5.6)	71(10.1)
20(28.1)	17(23.9)	9(12.7)	14(19.7)	19(26.4)	218(31.0)
6(8.5)	10(14.1)	7(9.8)	12(16.9)	3(4.1)	66(9.4)
2(2.8)	3(4.2)	2(2.8)	2(2.8)	1(1.4)	34(4.8)
71	71	71	71	72	704

表1-3 10の場面別に見た準拠対象(小学5年)

	場面 準拠 対象	1	2	3	4	5
		小5・男 I	父	4(19.0)	4(17.4)	2(9.5)
母	7(33.3)		4(17.4)	2(9.5)	2(10.0)	1(5.0)
兄 弟	3(14.3)		4(17.4)	6(28.6)	5(25.0)	5(25.0)
姉 妹	1(4.8)		1(4.3)	6(28.6)	2(10.0)	1(5.0)
友 人	5(23.8)		8(34.8)	4(19.0)	3(15.0)	9(45.0)
先 生	0		0	0	2(10.0)	0
その他	1(4.8)		2(8.7)	1(4.8)	0	2(10.0)
計	21		23	21	20	20

小5・男 II	父	4(20.0)	5(25.0)	1(5.0)	7(35.0)	4(21.1)
	母	5(25.0)	5(25.0)	5(25.0)	2(10.0)	4(21.1)
	兄 弟	2(10.0)	1(5.0)	7(35.0)	5(25.0)	1(5.3)
	姉 妹	3(15.0)	0	4(20.0)	1(5.0)	1(5.3)
	友 人	4(20.0)	6(30.0)	3(15.0)	2(10.0)	7(36.9)
	先 生	0	0	0	2(10.0)	0
	その他	2(10.0)	3(15.0)	0	1(5.0)	2(10.5)
	計	20	20	20	20	19

小5・女 I	父	2(12.5)	1(5.3)	2(12.5)	0	1(6.3)
	母	6(37.5)	3(15.8)	0	3(18.8)	1(6.3)
	兄 弟	1(6.3)	4(21.1)	2(12.5)	1(6.3)	0
	姉 妹	5(31.2)	6(31.6)	7(43.8)	5(31.2)	6(37.5)
	友 人	2(12.5)	3(15.8)	5(31.2)	4(25.0)	7(43.8)
	先 生	0	0	0	1(6.3)	0
	その他	0	2(10.5)	0	2(12.5)	1(6.3)
	計	16	19	16	16	16

小5・女 II	父	3(18.8)	4(23.5)	1(6.3)	0	1(6.3)
	母	2(12.5)	6(35.3)	5(31.3)	3(18.8)	5(31.3)
	兄 弟	1(6.3)	1(5.9)	2(12.5)	2(12.5)	0
	姉 妹	5(31.3)	3(17.6)	4(25.0)	6(37.5)	3(18.8)
	友 人	4(25.0)	2(11.8)	4(25.0)	3(18.8)	7(43.8)
	先 生	1(6.3)	0	0	1(6.3)	0
	その他	0	1(5.9)	0	1(6.3)	0
	計	16	17	16	16	16

()内は%

6	7	8	9	10	計
1(5.0)	10(52.6)	7(35.0)	2(10.0)	4(20.0)	42(20.7)
15(75.0)	3(15.8)	6(30.0)	13(65.0)	14(70.0)	67(33.0)
1(5.0)	1(5.3)	1(5.0)	2(10.0)	1(5.0)	29(14.3)
0	1(5.3)	2(10.0)	2(10.0)	0	16(7.9)
3(15.0)	3(15.8)	3(15.0)	1(5.0)	1(5.0)	40(19.7)
0	1(5.3)	0	0	0	3(1.5)
0	0	0	0	0	6(3.0)
20	19	20	20	20	203

3(15.0)	7(35.0)	9(45.0)	11(55.0)	7(35.0)	58(29.1)
10(50.0)	7(35.0)	6(30.0)	4(20.0)	7(35.0)	55(27.6)
0	1(5.0)	2(10.0)	1(5.0)	0	20(10.1)
3(15.0)	4(20.0)	0	1(5.0)	4(20.0)	21(10.6)
3(15.0)	0	2(10.0)	3(15.0)	1(5.0)	31(15.6)
0	1(5.0)	0	0	0	3(1.5)
1(5.0)	0	1(5.0)	0	1(5.0)	11(5.5)
20	20	20	20	20	199

0	8(47.1)	1(6.3)	5(29.4)	1(6.3)	21(12.7)
9(56.3)	5(29.4)	7(43.6)	7(41.2)	11(68.8)	52(31.5)
0	0	0	1(5.9)	0	9(5.5)
1(6.3)	2(11.8)	3(18.8)	2(11.8)	1(6.3)	38(23.0)
6(37.5)	2(11.8)	5(31.2)	2(11.8)	3(18.8)	39(23.6)
0	0	0	0	0	1(0.6)
0	0	0	0	0	5(3.0)
16	17	16	17	16	165

3(17.6)	4(23.5)	4(23.5)	4(26.7)	3(20.0)	27(16.7)
8(47.1)	9(52.9)	11(64.7)	3(20.0)	3(20.0)	55(34.0)
0	0	1(5.9)	1(6.7)	1(6.7)	9(5.6)
2(11.8)	2(11.8)	0	2(15.3)	4(26.7)	31(19.1)
4(23.5)	1(5.9)	0	4(26.7)	3(20.0)	32(19.8)
0	1(5.9)	0	0	1(6.7)	4(2.5)
0	0	1(5.9)	1(6.7)	0	4(2.5)
17	17	17	15	15	162

2) 被験者。主として、埼玉県入間市小学校4年生250名(男子132名, 女子118名), 中学校1年生151名(男子82名, 女子69名)計401名, ただし部分的に同小学校5年生36名(男子20名, 女子16名)を含む。

3) 調査時。1971年2月

4) 手続き。同市教育委員会指導主事と事前に打ち合せ, 同指導主事より各学級担任に趣意説明の上依頼し, 学級内で授業時間中に施行し回収する方法によった。

5) 分析の基本方針。上述の枠組による質問紙に対する上記の被験者の反応を基に, これを, (1)10の場面を通しての全般的特徴, (2)各場面別にみた準拠対象, (3)各被験児別にみた準拠対象, 準拠集団の類型, に分かち分析を試みた。そのそれぞれを, (i) 学年別, (ii) 性別, (iii) 選択水準別に分析を施行した。

したがって, 以下に, 結果を, 3つの観点よりの分析別に分けて記述する。

結 果

(その1) 全般的特徴

場面別, 個人別の検討からそれぞれ知られるように, 場面間ならびに個人間での反応にはかなりの変動がみられる。しかし, それにもかかわらず, なお全般的特徴に関しても, なお一定の傾向が見られる。

1) 10場面を通しての準拠対象の被選択傾向: 10の場面別にみた準拠対象の実数ならびにその百分率は表1-1, 表1-2の通りであるが, 7つの準拠対象の被選択順位をとり, 場面を通しての順位度を Kendall の W によってみるならば, その結果は表2のようになる。

以上のように, 学年別, 性別, 選択水準別のいずれをとっても, 10場面を通じての被選択順位には, 高度に有意な一致度 ($P < .001$) がみられる。そこで10場面全体を通じての順位を示したのが表3である。

それによれば, 小学生の場合には, 親, ことに同性の親が第1位に選択され, 友人はそれに次ぐ。中学生の場合には, 男女とも友人が第1位に選

表2 準拠対象被選択順位の場面の一致度

範疇			N	W	χ^2	p
小4	男	I	132	.706	42.36	.001
		II	132	.888	69.28	.001
	女	I	118	.653	39.18	.001
		II	118	.765	42.30	.001
中1	男	I	82	.834	50.04	.001
		II	82	.798	47.88	.001
	女	I	69	.746	44.76	.001
		II	69	.691	41.46	.001

表3 全体としての準拠対象被選択順位

範疇			順位							
			1	2	3	4	5	6	7	
小4	男	I	父	母	友人	兄弟	姉妹	その他	先生	
		II	父	友人	母	兄弟	先生	姉妹	その他	
	女	I	母	父	友人	姉妹	兄弟	その他	先生	
		II	母	父	友人	姉妹	兄弟	先生	その他	
中1	男	I	友人	父	母	兄弟	姉妹	その他	先生	
		II	友人	父	母	兄弟	先生	姉妹	その他	
	女	I	友人	母	姉妹	父	先生	その他	兄弟	
		II	友人	母	父	姉妹	先生	その他	兄弟	

択され、ついで同性の親、異性の親の順に選択されている。兄弟姉妹は、小・中学生とも、同性のものの方が上位に選択されている。先生の被選択順位は、性、学年、水準のいかにかわらず低い。

全体としての順位、学年別、性別、水準別の被選択の順位相関は表4の通りである。

IとIIの間での順位相関はいずれも有意であるが、女子の小・中の間での、また小学生の男・女間での選択順位には、ある程度の変動が認められる。

2) 10場面を通じての、I. 現実、II. 期待・願望の水準での準拠対象選択の一致度：先述のように、I・IIの両水準で準拠対象の選択を行なった

表4 学年別, 性別, 水準別順位相関係数

学年別		r_s	性別		r_s	水準別		r_s
男	I	.893**	小	I	.608	小	男	.905**
	II	.955**		II	.708		女	.962**
女	I	.678	中	I	.928**	中	男	.840*
	II	.786*		II	.786*		女	.962**

(注 ** $p < .01$, * $p < .05$)

表5 I・IIの両水準での準拠対象選択一致数

範疇	N	\bar{X}	S. D.	t	p		
小 男	152*	3.49	2.42	2.29	.05		
	134*	4.51	2.55				
中 男	82	3.91	2.42				
	69	3.84	2.52				
小学4年	286	3.67	2.46				
中学1年	151	4.24	2.47				
男子	234	4.08	2.44			1.885	.10
女子	203	3.63	2.54				

小学5年
男 20名
女 16名を含んだ数

が, 対応する各場面での選択対象の一致度は, 10場面のすべてで一致するものから, 完全に不一致のものにまでわたっている。その一致数の平均および標準偏差値を示したのが表5である。

また, 10場面でのI・II両水準での個人別反応一致数(表6-1), およびI・IIの反応の場面別一致数・比率(表6-2)を参考のため表示する。

表5から明らかなように, 全体として, 中学生の方が小学生に比し, 10場面を通じてのI・IIの両水準での準拠対象選択の一致度が大きい($t = 2.29, p < 0.05$), これを性別にみると, 女子は有意ではないが, 男子に関しては有意差がみられる($t = 2.03, p < 0.05$)。次に男・女間では, 全体としては男子の方が女子よりもやや一致度が高いが, 有意水準には達して

表6-1 10場面でのI（現実）II（期待）水準での個人別反応一致数

学年, 性	一致数											計	平均
	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0		
小, 男	1	3	5	17	14	19	25	19	17	18	14	152	3.84
小, 女	1	3	3	12	13	15	22	12	15	16	22	134	3.49
中, 男	0	2	8	12	7	12	13	8	12	2	6	82	4.51
中, 女	0	3	2	8	7	8	11	6	9	9	6	69	3.91
男	1	5	13	29	21	31	38	27	29	20	20	234	4.08
女	1	6	5	20	20	23	33	18	24	25	28	203	3.63
計	2	11	18	49	41	54	71	45	53	45	48	437	3.89

表6-2 I・IIの反応の10場面別一致数, 比率

学年, 性	場面										計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
小, 男	58	37	53	72	59	57	62	54	67	57	152
(%)	38.1	24.3	34.9	47.4	38.8	37.5	40.8	35.5	44.1	37.5	38.4
小, 女	43	29	46	63	41	50	47	48	48	54	134
(%)	32.0	21.6	34.3	47.0	30.6	37.3	35.0	35.8	35.8	40.2	34.9
中, 男	25	43	37	47	37	37	35	40	39	26	82
(%)	32.5	52.5	45.5	57.3	45.5	45.5	42.7	48.8	47.6	31.7	45.1
中, 女	20	23	28	38	23	27	21	31	30	29	69
(%)	29.0	33.3	40.6	55.0	33.3	39.1	30.5	45.0	43.5	42.0	39.1

いない ($t = 1.885$, $P < 0.10$; ただし両側検定による)。

また、このI・IIの一致度を場面別に吟味すると、男子の方が一致度が高いのは9場面、その逆は1場面しかない(これはサイン検定で $P < 0.08$, ただし両側検定)。さらに学年別にみると、男・女とも中学生の方が一致度が高いのは8場面であり、有意差があるとはいえない。しかし、I・IIでの準拠対象の一致度には、個人別・場面別の結果はほぼ対応するものがみられる。

(その2) 子どもの生活場面を通して見た準拠集団

これまでは場面によって準拠対象のとらえ方が異なっている点を考慮に入れずに、全般的な特徴をとらえることに主な焦点をあててきた。ここでは、子どもの準拠対象の実態を場面ごとに見ていきながら、場面に関係ない共通した傾向と、場面に依存する傾向とを見ていくことを主目的とする。

1. 各場面ごとの被選択率が顕著に高い準拠対象

これまでの検討では、全場面を通してみると、準拠対象として選択される対象は父・母・親友に偏っている傾向が示されてきた。場面によって選択される対象に相違があるかどうかを検討するために、次の基準により各場面ごとに準拠対象として選択される割合が顕著に高い対象を求めて、これまでの傾向をさらに細かく見ていくことにした。第1の基準は、被選択率が50%以上の対象、第2の基準は、被選択率が50%以下でも、1位に選択された対象が2位に選択された対象より χ^2 検定によって有意に選択率が高いと認められた対象、第3の基準は、被選択率3位の対象より有意に高いと認められた被選択率が1位と2位の対象、という基準をもうけた。この基準に従って各場面ごとに顕著な準拠対象を決定し、表1-2, 1-2, 1-3に示した(表中の○印で示されている対象)。

全体の傾向としては、中学1年は親友を準拠対象として選択する割合が顕著に高く、小学4年は父や母を選択する割合が顕著に高いという傾向が示された。また、場面別に見ると、場面1から5までの比較的現実の日常生活に起りやすい事象を扱った場面(以下具体的場面と略す)では親友が選択される割合が多く、場面6から10までの比較的抽象性の高い場面(以下抽象的場面と略す)では父や母が著しく多く選択されている傾向が示された。著しく多く選択されている対象を男女で比較してみると、男子は父親を、女子は母親を準拠対象として選択している傾向が見られた。準拠対象を選択する水準が現実水準か期待水準かという点については、中学1年では選択された準拠対象にあまり差はみられないが、小学4年では現実水準では父・母・親友の3対象に選択が分かれているが、期待水準では父親

が多く選択され、母親が顕著な準拠対象として選択されている場面でも、その被選択率は現実水準より低くなっている傾向が示された。この傾向は抽象的場面でいっそう顕著であった。

この全場面を通して見た特徴をさらに場面ごとに検討してみると、小学4年では場面2から5までの具体的場面では父や母とともに親友が準拠対象として選択されているが、場面1の相談にのってもらう人、および場面6から10の抽象的場面での準拠対象としては、父か母に選択が偏っていた。準拠対象を選択する水準が現実水準か期待水準かによる差が見られないのは、場面4と7であった。場面4の、ことばづかいや服装を手本にする人としては、男子は父と親友を選択し、女子は母と親友を選択していた。場面7の、世の中の出来事について意見や考えを聞く人としては、男女とも父親を準拠対象として顕著に選択していた。準拠対象を選択する水準が異なることによって選択された顕著な準拠対象が異なる場面は10場面中8場面あり、そのうち抽象的場面では、一貫して期待水準で父親が選択される割合が現実水準より多くなっていた。この傾向は、例外はあるが、具体的場面でも見られた。しかし場面2の、サイクリングなどにいっしょに行く人としては、男女とも現実水準では父母に準拠しているが、期待水準では親友を多く選択する傾向を示した。また、場面3の、好きなテレビ番組の話をする人としては、男女とも同性の兄弟姉妹を多く選択していたが、期待水準では顕著に多く選択されている対象は見出されず、親友とともに父や母が選択される割合が現実水準より高くなっていた。

中学1年において顕著に選択されている準拠対象をみると、小学4年に比べて、親友が選択される割合が一貫して高いことが示された。特に具体的場面では、準拠対象を選択する水準が、現実水準であれ期待水準であれ、親友が選択される割合が顕著に高かった。しかし抽象的場面では、男子は父親を、女子は母親を準拠対象として選択することが多く、この傾向は準拠対象を選択する水準に関係なく見られた。

サンプル数は少ないが、小学5年について顕著に選択された準拠対象を

見ると、具体的場面では兄弟姉妹と親友が比較的多く選択され、抽象的場面では父母が多く選択された。しかし準拠対象を選択する水準の相違によって、顕著に選択される準拠対象が異なるかどうかに関しては、一貫した傾向は見られなかった。なお、このサンプルの特徴としては、特に女子に多く見られる傾向であるが、具体的場面で同性の姉妹を準拠対象として選択する傾向が著しく見られた。

以上のように、顕著に選択されている準拠対象は、場面によっても、男女によっても、学年によっても、選択する水準によっても、かなり異なっていることが示された。しかし顕著に選択されている準拠対象も含めて、各準拠対象の選択のされ方は場面によってかなり異なっているので、次に準拠対象として選択される対象を男女別、水準別、学年別に、場面ごとに検討してみた。なお、これまで見てきたように、父・母・親友の3つの対象以外の対象については選択されている割合が一部を除いて低いので、以下の分析では父・母・親友・その他の4カテゴリーを用いた。また小学5年はサンプル数が少ないので、以下の分析からは除外した。

2. 男女差

準拠対象として選択された対象を、場面ごとに男女別に比較した結果、表7のような結果が得られた。この表から、学年や準拠対象の選択の水準の相違にはあまり関係なく、男子と女子とでは一貫した準拠対象の選択傾向があることが見出された。すなわち、場面1, 7, 9を除いた場面で、準拠対象選択傾向に男女差が見られ、しかもその差は各場面で一貫して、以下のような傾向にあった。まず、男子は女子に比べて父親を準拠対象として選択する傾向が見られ、女子は男子より母親を多く選択する傾向が見出され、その交互作用によって男女による準拠対象の選択のしかたに差が生じる傾向が見られた。次に親友を準拠対象として選択する割合は、具体的場面では、男子の方が女子よりも高いことが見出された。抽象的場面では、準拠対象を選択する水準が現実水準である時は、一部では女子の方が親友を多く選

表7 各場面における準拠対象の男女別比較 (***.001, **.01, *.05の水準で有意差あり; △.10の水準; N. S.有意差なし; 3df)

場面	中1・現実水準(I)				中1・期待水準(II)			
	χ ² 値	父	母	親友 他	χ ² 値	父	母	親友 他
1	N. S.				N. S.			
2	20.301***		M<F	M>F M<F	13.445**		M<F M>F	M<F
3	N. S.				8.847*		M<F M>F	
4	14.271***	M>F	M<F		17.653***	M>F	M<F M>F	
5	18.307***		M<F	M>F M<F	13.299**	M>F	M<F	
6	N. S.				11.249*	M>F	M<F	
7	N. S.				N. S.			
8	11.098*	M>F		M<F	12.365**	M>F	M<F	
9	N. S.				N. S.			
10	N. S.				10.309*	M>F	M<F	

場面	小4・現実水準(I)				小4・期待水準(II)			
	χ ² 値	父	母	親友 他	χ ² 値	父	母	親友 他
1	N. S.				N. S.			
2	12.331**		M<F	M>F M<F	7.437			(M<F)(M>F)
3	N. S.				N. S.			
4	35.554***	M>F	M<F		32.005***	M>F	M<F	
5	24.030***		M<F	M>F M<F	N. S.			
6	9.908*	M>F		M<F	10.608*	M>F		M<F
7	N. S.				N. S.			
8	19.043***	M>F	M<F		16.425***	M>F	M<F	M<F
9	N. S.				N. S.			
10	7.843△	(M>F)			N. S.			

(注) 表中右側の大小関付は、期待値との差が大きい準拠対象に関する傾向を示したものである。

択しているものの、親友の選択率にはほとんど男女差は見出されず、期待水準では有意な男女差は場面のいかなを問わず見出されなかった。その他の項で示された有意な男女差は、女子が男子に比べて兄弟姉妹(特に姉妹)を準拠対象として選択する割合が高いことによるものである。

これらの結果から、男女とも同性の親を準拠対象として選択することが多く、親に準拠していない場面では、男女とも親友を準拠対象としているにもかかわらず、その選択比率は男子の方が高く、女子は男子に比べて親友

の他にも、姉妹を準拠対象として選択する割合が高いことが示された。

3. 準拠対象を選択する水準による差

準拠対象を選択する水準が現実の場合（Ⅰ）と、期待の場合（Ⅱ）を比較したのが表8である。全体としては中学1年は、小学4年よりも水準のちがいでによって準拠対象を選択する割合が有意に異なる場面が少なかった。中学1年で現実水準と期待水準との間で選択が有意に異なる場面では、父は現実水準より期待水準で多く選択される傾向が見られた。また母は具体

表8 各場面における準拠対象の選択水準別比較（表中の記号は表7を参照のこと）

	中1・男				中1・女			
	χ^2 値	父	母	親友 他	χ^2 値	父	母	親友 他
1	N. S.				N. S.			
2	N. S.				N. S.			
3	N. S.				10.503*	I < II	I < II	I > II
4	N. S.				N. S.			
5	8.393*	I < II		I > II	9.311*	I < II	I < II	I > II
6	6.900△	(I < II)(I > II)			N. S.			
7	N. S.				N. S.			
8	N. S.				6.553△		(I > II)	
9	N. S.				N. S.			
10	13.275**	I < II	I > II	I < II	N. S.			
	小4・男				小4・女			
1	30.864***	I < II	I > II	I > II	26.152***	I < II	I > II	I < II
2	17.033***	I > II		I < II	17.640***	I > II		I < II
3	22.233***	I < II	I < II	I > II	29.685***	I < II		I > II
4	N. S.				N. S.			
5	24.816***	I < II	I < II	I > II	16.116**	I < II	I < II	I > II
6	10.226*	I < II	I > II		14.412**	I < II	I > II	I < II
7	N. S.				11.097*			I < II I < II
8	N. S.				14.673**	I < II	I > II	
9	6.900△	(I > II)(I < II)			29.859***	I < II	I > II	I < II
10	15.162**	I < II	I > II	I < II	18.977***	I < II	I > II	I < II I > II

的場面では、女子が期待水準で多く選択しているが、男子にはその傾向が見られなかった。しかし抽象的場面では、男女とも現実水準で母を多く選択していることが示された。親友や兄弟姉妹は、具体的場面では現実水準の方が期待水準より多く選択され、抽象的場面では水準のちがいによる準拠対象の選択率に差は見られなかった。

小学4年では、一部の場面を除いて、父親は期待水準の方が現実水準より多く選択され、母親は現実水準の方がより多く選択される傾向が示され、この交互作用によって現実水準と期待水準の間に有意な差が生じる傾向が見られた。親友については一部を除いては期待水準で多く選択され、特に抽象的場面でもこの傾向が見られたことは、中学1年での結果と著しい対比を示している。その他の兄弟姉妹に関しては、男女とも具体的場面では現実水準で多く選択されているのに対し、女子では抽象的場面で期待水準の方が現実水準より多く選択している傾向がみられた。また、中学1年と小学4年、および男子と女子を通して、父母が顕著に多く選択されていない場面（場面3と5）では、準拠対象を選択する水準が異なっても被選択率が最も高い対象は同一であるにもかかわらず、それ以外の準拠対象は水準によって異なって選択され、現実水準では親友や兄弟姉妹が多く選択されていたのに対して、期待水準では父母が多く選択される傾向が示された。

4. 学年差

準拠対象として選択された対象の割合を、学年別に比較したのが表9である。この表から、男女別に見ても、水準別に見ても、ほとんどすべての場面で、学年による差が見られた。全体としては小学4年は父や母を多く選択し、中学1年は親友を多く選択していて、その交互作用によって学年による有意な差が生じる傾向が見出された。兄弟姉妹を準拠対象として選択する傾向は、中学1年の方が小学4年より多い傾向が見られた。しかし場面3では、男女とも現実水準で小学4年の方が兄弟姉妹を多く選択する傾向が示された。この場面3は、他の場面に比べて小学4年が兄弟姉妹を

表9 各場面における準拠対象の選択の学年別比較（表中の記号は表7を参照のこと；中：中1，小：小4）

	男・I				男・II			
	χ^2 値	父	母	親友 他	χ^2 値	父	母	親友 他
1	57.364***		中<小	中>小 中>小	34.981***	中<小	中<小	中>小 中>小
2	77.256***	中<小	中<小	中>小	24.745***	中<小	中<小	中>小
3	16.733***			中>小 中<小	26.531***	中<小	中<小	中>小
4	7.580△	(中<小)			20.233***	中<小	中<小	中>小
5	N. S.				8.161*		中<小	中>小
6	30.147***	中<小	中<小	中>小	25.221***	中<小	中<小	中>小
7	28.287***		中<小	中>小	14.105**	中<小	中<小	中>小 中>小
8	6.869△		(中<小)		8.880*		中<小	中>小
9	23.817***		中<小	中>小	18.370***		中<小	中>小 中>小
10	11.700**	中<小		中>小	12.782**			中>小
	女・I				女・II			
	χ^2 値	父	母	親友 他	χ^2 値	父	母	親友 他
1	70.729***	中<小	中<小	中>小 中>小	42.958***	中<小		中>小 中>小
2	43.597***	中<小	中<小	中>小	7.963*		中<小	中>小
3	24.407***			中>小 中<小	11.818**	中<小		中>小
4	16.042**	中<小	中<小	中>小	12.127**		中<小	中>小
5	N. S.				N. S.			
6	22.856***	中<小	中<小	中>小	11.183*	中<小		中>小
7	12.293***	中<小		中>小	N. S.			
8	21.522**		中<小	中>小	N. S.			
9	36.013***	中<小	中<小	中>小	20.027***	中<小		中>小
10	28.237***		中<小	中>小 中>小	14.221**	中<小		中>小

準拠対象として選択する割合が著しく高いことが、この結果に関連していると思われる。しかしこの傾向は期待水準では見られなかった。

この他に学年による準拠対象の選択のしかたの違いを示すものとして、出現比率は他の対象に比べてそれほど多くなく10%台であるが、先生に対する選択のしかたがあげられる。先生は、男女・学年を通して、現実水準ではほとんど選択されていず、期待水準でも次の2場面以外ではほとんど選択されていなかった。しかし場面7と9の期待水準で、中学1年は男女とも小学4年より多く先生を選択していることが見出された。しかも先生

を準拠対象として選択する割合が高いこの場面7と9では、他の場面に比べて父や母が選択される割合が低くなっていて、その場面での顕著な準拠対象は見られなかった。すなわちこの場面では、父や母の役割の一部を先生に対して期待しているのではないかと考えられる。

5. 生活場面を通して見た準拠対象についての考察

準拠対象として選択されている対象は、男女、学年、選択水準、場面によってかなり異なっていることが示されたが、次のような特徴をもつ場面から、準拠対象の選択のされ方をもう一度検討してみた。学年差は見られるが、男女差が見られない場面(1, 3, 7, 9, 10)から、男女では共通しているけれども学年によって準拠対象の選択が異なっている点、すなわち発達による準拠対象の選択のしかたの違いを見ると、抽象的場面・具体的場面にかかわらず、小学4年は父や母を準拠対象として選択しているのに対して、中学1年は親友を準拠対象として選択する割合が高いことが見出された。また、父と母に対する選択に限ってみると、小学4年では、父親は、現実水準より期待水準で準拠対象として選択される割合が多いのに対して、母親は期待水準より現実水準で選択される割合が高いという傾向が見られたが、この傾向は中学1年には見られなかった。

次に準拠対象の選択のしかたが男女によって異なっているけれども学年間には差がない場面(5)から、発達による差はないが男女によって異なる準拠対象の選択のしかたを検討してみた。この場面は小学4年、中学1年とも親友を最も顕著な準拠対象として選択しているにもかかわらず、親友以外の準拠対象の選択のされ方は異なっていた。すなわち男子は女子より父を多く選択しているのに対して、女子は男子より母を多く選択している傾向が見られた。しかし男女とも父親は期待水準が多く選択され、母親は現実水準で多く選択される傾向が見られた。同様の傾向は、男女差と学年差がともに見られるが選択水準による差が見られない場面(4)でも見出された。

男女差・学年差・水準差のすべてが見られる場面(2, 6)でも、これまで

述べてきた傾向が見出された。しかしこの場面でも、中学1年では水準による差は見られなかった。小学4年では、具体的場面(2)では現実水準で父や母を選択し、期待水準では親友を選択する傾向が見られた。抽象的場面(6)では、現実水準で母親を多く選択し、期待水準では父親を多く選択する傾向が見られた。

これらの傾向をまとめると、準拠対象の選択のしかたは場面によって次のように異なっていることが示された。(1)具体的場面では親友、抽象的場面では父や母が多く選択されていた。(2)準拠対象の選択のしかたを男女別にみると、女子は男子よりも母や兄弟姉妹を多く選択する傾向が見られた。(3)準拠対象を選択する水準が現実の場合は母親、期待の場合は父親が多く選択されていたこと、また具体的場面に限ってみると、父と母以外では期待水準では現実水準に比べて男子は親友を、女子は親友の他にも兄弟姉妹を多く選択する傾向が見られた。また特殊な例として場面2では、小学4年は現実水準では父を選択し、期待水準では親友を選択する傾向が見られた。これと関連して、小学4年の女子は、特に抽象的場面で、母親に対する選択は現実水準で多く、親友や兄弟姉妹に対する選択は期待水準の方が多いいことが示された。(4)学年によって準拠対象の選択のしかたが異なるところから、発達による差を見ると、中学1年は親友を準拠対象として選択し、小学4年は父や母を準拠対象として選択していることが見出された。また出現比率は少ないが、中学1年は小学4年より先生を準拠対象として期待水準で選択する割合が高いことも見出された。

(その3) 個人別にみた準拠対象・準拠集団の型

ここでは、子どもの準拠集団をみるにあたり、典型的な生活場面との関係での、子どもの準拠対象の、特定のものへの集中、ないし多様なものへの分散の傾向を、学年別、性別、選択の水準別に分析し検討し、準拠人・準拠集団の型の特徴を明らかにしようとする。

結果の整理の手続き：準拠対象の特定のものへの集中傾向を吟味するための基準として、次の3つを設けた。

(1)①同一対象への集中型（父・母・友人に関しては、7以上、それ以外は6以上選択しているもの）、②2つの対象への集中型（2つ合計で8以上で、かつ少なくとも1つを2以上選択しているもの）③3つの対象への集中型（3つ合計で9以上で、かつ少なくとも1つを2以上選択しているもの）④その他の型（上記3つに該当しないもの）という基準で、準拠人集中傾向をみること、(2)7つの準拠対象のうち、10場面中の半数以上において同一対象を選択しているという基準で、準拠の型をみること。(3)(2)を基として準拠人をまとめて、①家族、②友人、③その他とした場合の準拠集団の特徴をみること。そのいずれをも、(i)学年別、(ii)性別、(iii)選択の水準別に分析する。

次に、上述の基準に基づいて分析した結果の概要を記述する。

1) 各人の準拠対象の型

父をA、母をB、兄弟をC、姉妹をD、友人をE、先生をF、その他をG、として、同一対象集中型をみると、A型、B型などとなる（その可能な数は7）。次に、2つの対象への集中型は、AB型、AE型、BD型などとなる（可能な数は21）。さらに、3つの対象への集中型は、ABE型、ABC型などとなる（とりうる可能な数は35）。

各範疇ごとに、頻数の4%以上の型のみられたものを順位別にまとめたのが、表10である。なお、上記基準の上位に入らぬものを一括して、その他（O）型としている。

これをみると、学年別の差異は顕著である。小学校では父母や家族が比較的多く、中学校では、友人の占める比重が大きい。上位にEを含まないものはほとんどない。それは、Iに関して、男女をまとめて表示してみると、いっそう顕著にみてとれる（表11）。

次に、性別にみれば、学年、水準をこえて、男子は父および兄弟を含むものを、女子は母および姉妹を含むものを選択する傾向がある。

表10 各人別準拠対象の型の数
(括弧内は%を示す)

範 疇		順 位		順位							
				1	2	3	4	5	6	7	8
小 4 (N=132)	男	I	AB 25 (18.9)	ABE 22 (16.7)	BE 14 (10.6)	A 10 (7.6)	ABC 10 (7.6)	B 8 (6.1)	O 43 (32.6)		
		II	AB 28 (21.7)	ABE 20 (15.2)	A 15 (11.4)	AE 8 (6.1)	BE 7 (5.3)	B 6 (4.5)	E 6 (4.5)	O 42 (31.8)	
	女	I	AB 17 (14.4)	ABD 17 (14.4)	B 16 (13.6)	BE 12 (10.2)	ABE 12 (10.2)	BD 6 (5.1)	ABC 5 (4.2)	O 33 (28.0)	
		II	AB 22 (18.6)	ABE 19 (16.1)	B 9 (9.6)	A 6 (5.1)	BE 5 (4.2)	ABC 5 (4.2)	ABD 5 (4.2)	O 47 (39.8)	
中 1 (N=82)	男	I	ABE 16 (19.5)	E 14 (17.1)	AE 9 (11.0)	BE 8 (9.8)	ACE 6 (7.3)	O 29 (35.4)			
		II	E 17 (20.7)	AE 16 (19.5)	BE 13 (15.9)	ABE 11 (13.4)	CE 4 (4.1)	O 21 (25.5)			
	女	I	BE 13 (18.6)	E 11 (15.9)	ABE 8 (11.6)	AE 6 (8.5)	BDE 5 (7.1)	D 3 (4.3)	BD 3 (4.3)	O 20 (29.0)	
		II	BE 12 (17.4)	ABE 8 (11.6)	E 4 (5.8)	AB 3 (4.3)	AE 3 (4.3)	O 39 (56.0)			

表11 各人別準拠対象の型のIの学年別比較

範 疇		順 位		順位					
				1	2	3	4	5	6
I	小 4 (N=250)	AB 42 (16.8)	ABE 36 (13.4)	BE 26 (10.8)	B 24 (9.6)	ABD 20 (8.0)	ABC 15 (6.0)		
	中 1 (N=151)	E 25 (16.5)	ABE 24 (15.9)	BE 21 (13.9)	AE 15 (10.0)	ACE 6 (3.9)	BDE 6 (3.9)		

さらに選択水準別にみると、小学校では、男女とも、父はIでよりもIIで多く、逆に母はIの方がIIよりも多い。中学校では、男子の場合、II

の方がⅠよりも多いのは友人と父であるが、女子の場合には、友人はⅠの方がⅡより多く選ばれる傾向がある。中学女子のⅡは分散の傾向が顕著である。

全般を通じ、最も一般的なのは、父・母・友人にまたがるABE型である。

2) 各人の準拠対象の特定のものへの集中傾向

(1)の基準では、とりうる可能な型は $63+\alpha$ となり、煩雑となるので、次に、10場面中5以上特定対象に集中しているかいなかにより、A(父)型、B(母)型、E(友人)型、O(その他)型、N(5以上に集中するものがないもの)型の5つに再分類すると、きわめて顕著な傾向が見出された。

(i) 学年別の比較

表12—1にまとめたように、Ⅰに関してもⅡに関しても、また男・女別にみても、男女をまとめてみても、いずれの場合にも学年差は顕著にみられる。A・B・E・O・Nと学年(中1と小4)の間には、いずれをとっても、その準拠対象の集中傾向には有意差がある。

それを要約していえば、小学生の場合には、父・母型が多く、中学生の場合には、友人型が多く、さらにⅡに関しては、中学校ではNの比率が高いといえる。

(ii) 男女別の比較

これもまた、小・中のいずれを問わず、またⅠ・Ⅱの水準にかかわらず、きわめて有意な性差が認められた。それは表12—2に表示される通りである。

全体を通じて、男女の準拠型には差がないとの帰無仮説からすれば、男子においては、A(父)型とE(友人)型が期待値よりも多く、女子においては、B(母)型とO(その他)型が期待値よりも多いという方向での性差が一貫してみられている。

(iii) 選択水準別の比較

(表12-1) 個人別準拠対象の集中傾向：学年別比較

学年	対象	A	B	E	O	N	計	
I	男 中	11	6	35	7	23	82	$\chi^2=49.84^{***}$
	小	33	46	11	4	38	132	
	計	44	52	46	11	61	214	
I	女 中	1	11	26	11	20	69	$\chi^2=67.85^{***}$
	小	8	63	4	5	38	118	
	計	9	74	30	16	58	187	
I	中	12	17	61	17	44	151	$\chi^2=103.76^{***}$
	小	41	109	15	9	76	250	
	計	53	126	76	26	120	401	
II	男 中	10	3	30	3	36	82	$\chi^2=29.11^{***}$
	小	45	21	19	5	42	132	
	計	55	24	49	8	78	214	
II	女 中	5	12	19	4	29	69	$\chi^2=13.31^{**}$
	小	23	31	17	13	34	118	
	計	28	43	36	17	63	187	
II	中	15	15	49	7	65	151	$\chi^2=36.40^{***}$
	小	68	52	36	18	76	250	
	計	83	67	85	25	141	401	

(注) $\left\{ \begin{array}{l} *** .001 \\ ** .01 \\ * .05 \\ \triangle .10 \end{array} \right.$

(表12-2) 個人別準拠対象の集中傾向：男女別比較

性		対象	A	B	E	O	N	計	
I	小	男	33	46	11	4	38	132	$\chi^2=20.56^{***}$
		女	8	63	4	5	38	118	
計			41	109	15	9	76	250	
I	中	男	11	6	35	7	23	82	$\chi^2=10.65^*$
		女	1	11	26	11	20	69	
計			12	17	61	18	43	151	
I		男	44	52	46	11	61	214	$\chi^2=20.33^{***}$
		女	9	74	30	15	59	187	
計			53	126	76	26	120	401	
II	小	男	45	21	19	5	42	132	$\chi^2=13.98^{**}$
		女	23	31	17	13	34	118	
計			68	52	36	18	76	250	
II	中	男	10	3	30	3	36	82	
		女	5	12	19	4	29	69	
計			15	15	49	7	65	151	
II		男	55	24	49	8	78	214	$\chi^2=19.61^{***}$
		女	28	43	36	17	63	187	
計			83	67	85	25	141	401	

(表12-3) 個人別準拠対象の集中傾向：水準別比較

水準 \ 対象		A	B	E	O	N	計	
中 男	I	11	6	35	7	23	82	$\chi^2=5.89$
	II	10	3	30	3	36	82	
計		21	9	65	10	59	164	
中 女	I	1	11	26	11	20	69	$\chi^2=8.71\Delta$
	II	5	12	19	4	29	69	
計		6	23	45	15	49	138	
小 男	I	33	46	11	4	38	132	$\chi^2=13.62^{***}$
	II	45	21	19	5	42	132	
計		78	67	30	9	80	264	
小 女	I	8	63	4	5	38	118	$\chi^2=29.97^{***}$
	II	23	31	17	13	34	118	
計		31	94	21	18	72	236	
中	I	12	17	61	18	43	151	$\chi^2=11.09^*$
	II	15	15	49	7	65	151	
計		27	32	110	25	108	302	
小	I	41	109	15	9	76	250	$\chi^2=38.51^{***}$
	II	68	52	36	18	76	250	
計		109	161	51	27	152	500	
	I	53	126	76	27	119	401	$\chi^2=27.09^{***}$
	II	83	67	85	25	141	401	
計		136	193	161	52	260	802	

(表13-1) 準拠集団の傾向：学年別比較

学年	集団	F	P	O	計	
I	男 中	22	35	25	82	$\chi^2=41.21^{***}$
	小	83	11	38	132	
	計	105	46	63	214	
I	女 中	22	26	21	69	$\chi^2=40.81^{***}$
	小	76	4	38	118	
	計	98	30	59	187	
I	中	42	61	46	151	$\chi^2=82.80^{***}$
	小	159	15	76	250	
	計	201	76	122	401	
II	男 中	16	30	36	82	$\chi^2=31.67^{***}$
	小	80	19	43	132	
	計	96	49	79	214	
II	女 中	19	19	31	69	$\chi^2=14.50^{***}$
	小	66	17	35	118	
	計	85	36	66	187	
II	中	35	49	67	151	$\chi^2=42.94^{***}$
	小	146	36	78	250	
	計	181	85	145	401	

(表13-2) 準拠集団の傾向：男女別比較

性 \ 集団		F	P	O	計	
I	小 男	83	11	38	132	$\chi^2=1.89$
	女	76	4	38	118	
	計	159	15	76	250	
I	中 男	22	35	25	82	$\chi^2=0.39$
	女	22	26	21	69	
	計	44	61	49	151	
I	男	105	46	63	214	$\chi^2=1.93$
	女	98	30	59	187	
	計	203	76	122	401	
II	小 男	80	19	43	132	$\chi^2=0.40$
	女	66	17	35	118	
	計	146	36	78	250	
II	中 男	16	30	36	82	$\chi^2=0.99$
	女	19	19	31	69	
	計	35	49	67	151	
II	男	96	49	79	214	$\chi^2=0.85$
	女	85	36	64	187	
	計	181	85	143	401	

(表13-3) 準拠集団の傾向：水準別比較

水準	集団	F	P	O	計	
中 男	I	22	35	25	82	$\chi^2=3.31$
	II	16	30	36	82	
計		38	65	61	164	
中 女	I	22	26	21	69	$\chi^2=3.23$
	II	19	19	31	69	
計		41	45	52	138	
小 男	I	83	11	38	132	$\chi^2=2.49$
	II	80	19	43	132	
計		163	30	81	264	
小 女	I	76	4	38	118	$\chi^2=8.87^*$
	II	66	17	35	118	
計		142	21	73	236	
中	I	44	61	46	151	$\chi^2=6.23^*$
	II	35	49	67	151	
計		79	110	113	302	
小	I	159	15	76	250	$\chi^2=3.53$
	II	146	36	78	250	
計		305	51	154	500	
	I	203	76	122	401	$\chi^2=2.04$
	II	181	85	145	401	
計		384	161	267	802	

全体を通覧していえることは、表12—3からも明らかなように、Ⅰが期待値より多いものは、B（母）型であり、これに対して、Ⅱの方が期待値より多くみられるのは、A（父）型およびN型（集中傾向のないもの）である。ただし中学校男子に関してのみは、ⅠとⅡの間に有意差が認められていない。

3) 準拠対象をまとめて準拠集団とした場合の比較

(2)の基準での準拠対象をさらにまとめて、この種の調査で一般にとられているように、家族集団(F)、同輩集団(P)およびその他または特定のもののない場合(O)に類別してみると、(2)と較べていくつかの興味ある結果が得られた。

(i) 学年別の比較

(2)の場合と同様な顕著な傾向がみられる。すなわち、男・女、Ⅰ・Ⅱのいずれにおいても、小学生は家族を、中学生は同輩を選択する傾向が顕著である。表13—1にみられる通り、その χ^2 値は、いずれの場合にも有意($P < .001$)である。

(ii) 男女別の比較

2—iiの場合とは異なって、このようにまとめると、いずれの場合にも有意差が認められない。念のためそれを表示したのが、表13—2である。

(iii) 選択水準別の比較

この場合にも、このようなかたちにまとめると、2—iiiでは認められていたⅠ・Ⅱの間での有意差がほとんど認められなくなる。それをまとめて示したものが表13—3である。

要約と考察

本研究は、道德性の発達に關与する要因のひとつとしての準拠集団の果たす役割を明らかにしようとするにあたり、まずその第1段階として、小学校・中学校の児童・生徒の、典型的な生活場面における準拠対象を調べようとした予備的研究である。したがって、これはこれで完結したものでは

なく、後続の研究発表へのひとつの序論、導入の役を果たすものである。

本研究では、準拠集団を、子どもたちが、具体的・殊別的、ならびに、やや抽象的・一般的なかたちでとらえた、典型的な生活場面で、話す人・聞く人・相談する人・手本にする人など、現実にも中心的な意味のある主たる相互作用を行なっている人と、話したい人・聞きたい人・相談したい人・手本にしたい人など、中心的な相互作用の相手として期待し願望する人を、子どもたちに問うという形で、その準拠人・準拠対象を通して調べるという方法をとった。

上述の方法に対応する質問紙法によって得られた資料は、これを(1)10場面全体を通しての特徴、(2)10の場面別にみた準拠対象・準拠集団の傾向、(3)各被験児別にみた準拠対象・準拠集団の型、の3つの観点から分析した。それらのいずれにおいても、学年別、性別、選択水準別の分析を行なった。

その個々の結果は、結果の節に(その1)から(その3)に分けて記述した通りである。それらを通じて、まず、小学生では父や母を準拠対象とする傾向が大であるのに対し、中学生では親友を準拠対象とする割合が大きくなっている。ことに一般的場面では親を選択する割合が高い。なお、小学生の場合には、現実水準では母親に、期待願望の水準では、父親に準拠する割合がより高いことが認められた。

性差に関しては、男子は父親を、女子は母親を選択する傾向があり、兄弟姉妹に関しても、同性の兄弟姉妹の方が相対的には多く選択されるようになっている。これは、小学生までには、同性の親、兄弟とより多く同一視し、より多くモデルとするようになっているとの、従来より累積されてきている知見と合致する結果である。

選択水準別にみると、現実水準では母親がより多く選択され、期待・願望の水準では父親がより多く選択される傾向は明らかである。これは、日頃の現実の相互作用は母親との方が密であり、父親とは期待するほどの接触を保ちがたい傾向があることを反映しているものとみることもできよう。

個々の被験児ごとに、10場面中5以上を集中して選択するという基準で準拠型を設けて分析した場合には、男女差や選択水準による差が有意に認められているのに、さらにそれをまとめて、ふつうよく行なわれているように、家族集団、同輩集団として分析すると、その差異が認められなくなる事実は興味深い。これは、準拠人を通じて準拠集団をみていくことの意義を傍証するものといえよう。

これらの結果は、筆者らの作成した質問紙に対する子どもの反応——それも予め用意した主要選択対象の中から最もぴったりすると子どもの認知するものをひとつ選択するという形式の——を通して得られたものであった。したがって、それらは現実に具体的に子どもがどのように行動しているかを保証するものではない。その裏付けを求めるような観察・面接なども求められることのひとつであろう。

また筆者らの用いた枠組が最適であったか否かに関しても、十分な保証はない。しかしながら、諸種の制約のある予備的研究であるにせよ、子どもたちの準拠人・準拠集団に関する実態の一端が示されたものといえることはできよう。

これをひとつの出発点として、漸次、道徳性発達に関する指標との関連を検討していく予定である。

稿を終わるに臨み、資料蒐集に協力を惜しまれなかった、埼玉県入間市教育委員会教育次長発智弘雄氏に心からの謝意を表す。なお、本稿は、結果の(その2)は向井が執筆を分担し、その他はすべて古畑が執筆した。

引用文献

Bandura, A. 1969. Social learning theory of identificatory processes. In D. A. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally, Pp. 213-262.

Bandura, A. 1972. Modeling theory: some traditions, trends, and disputes. In R. D. Parke (Ed.) *Recent trends in social learning theory*. New York: Academic Press, Pp. 35-61.

Bandura, A. & McDonald, F. J. 1963. The influence of social reinforce-

ment and the behavior of models in shaping children's moral judgments. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 67, 274-281.

Bandura, A. & Walters, R. H. 1963. *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

古畑和孝 1973. 人格の発達——人格形成と社会化を中心にして 藤永 保 (編)「児童心理学」有斐閣, Pp. 329-388.

古畑和孝 1974. 社会的学習と社会化 齊藤耕二・菊池章夫 (編)「社会化の心理学」川島書店, Pp. 31-45.

古畑和孝・林 仁忠・近藤邦夫 1967. 道德性の発達: (1) 道德性テスト作成の試み「日本教育心理学会第9回総会発表論文集」 212-213.

古畑和孝・深見敦子・発智弘雄 1971. 準拠集団と道德性の発達 (第1報告)「日本教育心理学会第13回総会発表論文集」416-421.

Hoffman, M. L. 1970. Moral development. In P. H. Mussen (Ed.) *Carmichael's manual of child psychology*, Vol. 2. New York: Wiley, Pp. 261-359.

Hyman, H. H. & Singer, E. (Eds.) 1968. *Readings in reference group theory and research*. New York: Free Press.

Kohlberg, L. 1963. The development of children's orientations towards a moral order: I. sequence in the development of moral thought. *Vita Humana*, 6, 11-33.

Kohlberg, L. 1964. Development of moral character and ideology. In M. L. Hoffman & L. W. Hoffman (Eds.) *Review of child development research*. Vol. 1, New York: Russell Sage Foundation, Pp. 383-431.

Kohlberg, L. 1969. Stage and sequence: the cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally, Pp. 347-480.

Newcomb, T. M., Turner, R. H. & Converse, P. E. 1965. *Social psychology: the study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

ニューカム・ターナー・コンヴァース (古畑和孝・訳) 1973. 「社会心理学: 人間の相互作用の研究」岩波書店.

Piaget, J. 1932. *Le jugement moral chez l'enfant*. Libraire Felix Alcan.

Piaget, J. 1967. *Six psychological studies*. New York: Random House,

Wright, D. 1971. *The psychology of moral behaviour*. Middlesex, England: Penguin Books.

Reference Groups and Moral Development (I):

Reference Persons for Children

Kazutaka Furuhata and Atsuko Mukai

The present study was undertaken to investigate the roles of reference groups as a factor affecting the individual's moral behavior as a part of a series of cooperative research projects on the psychological basis of moral development, headed by Professor Keisuke Sawada.

There are several different theoretical perspectives in moral behavior. The individual may be treated as a function of social control or control by others. Despite the fact that the influence of the reference group on the individual's moral behavior is often stressed, there is very little empirical evidence to support it.

In the present study, a test of measuring one's reference group was designed in terms of specifying one's reference persons as a preliminary step. A questionnaire consisted of ten typical life situations in which each child was asked to choose a person most appropriate for him to refer to both at a level of reality and at a level of wishes and expectations.

The subjects were 250 (132 male and 118 female) fourth grade pupils in elementary schools and 152 (82 male and 69 female) second year students in a junior high school in Iruma-shi, Saitama Prefecture.

The responses of the subjects were analyzed regarding age differences, sex differences and the difference between the responses to real situations and those to expected situations.

The analyses of the data revealed the followings.

- 1) Fourth grade pupils are more likely to choose parents as their reference persons, while junior high school students are more likely to choose their close friends, regardless of sex and the level of the response. The tendency to change reference persons for children from parents to close friends is quite conspicuous.
- 2) Boys tend to choose fathers and brothers more than mothers and sisters, and girls tend to choose mothers and sisters more than fathers and brothers, regardless of the subjects' age.
- 3) There is a tendency that the father is chosen more at a level of expectations, and the mother is chosen more at a level of reality in both sexes and both age levels.

The findings were consistent with the predictions based on children's developmental trends. Finally, some promising lines for further research have been suggested.